

十



壺屋やちむん通り会

壺屋歩き やちむん十



さまざまな国のやちむん(やきもの)を使っていた琉球王国時代→薩摩侵攻の後、自国でやちむんをつくりはじめた王府→朝鮮・中国・薩摩の技術を導入→窯を壺屋に統合→琉球処分→本土で大量生産された磁器の流入→民藝運動→沖縄戦…。

沖縄という小さな島は、ことさら翻弄されづけてきた歴史をもちます。そんななかで、沖縄のやちむんが残ったのはなぜでしょうか。

もともと沖縄は、台風や干ばつなどの自然災害に襲われやすく、資源に乏しい土地。ここで生き抜くためには、暮らしのあらゆる面においてたくまさしさやおおらかさが必要でした。陶工たちの歴史もまた然り。ままならない現実を背負ったどの時点においてもマイナスをプラスにしてきました。

歴史を知るほどにおもしろい壺屋歩き。やちむん通りで、那覇市立壺屋焼物博物館で、やちむん通り会発行の冊子『壺屋の十』で、触れてみてください。

一、歴史を知るほど あもしろい

一

壺屋焼には
次のような
特徴があります。

他地域に類がないほど、伝統の技法が多様。



赤土、ジャーガル、クチャ、マンガンなど、
地域の鉱物資源が活かされている。

東南アジア、朝鮮、中国、薩摩の技術を
オーバーラップさせてきた歴史がある。

抱瓶(ダチビン)、厨子
シーサーなど、独特の姿形。



二、壺屋焼の 特徴を探る

二



南ヌ窯(フェースカマ)

主に酒甕、水甕、厨子などを焼く荒焼専用の登り窯として現存する唯一のもの。県指定有形文化財。

三、 「戦前から残る 6つの風景」

三



東ヌ窯(アガリヌカマ)と新垣家

上焼(施釉)の登り窯で、屋号からアガリヌカマと呼ばれています。窯と同じ敷地の新垣家は、昔の陶工の暮らしの形を残す大規模な屋敷。



壺屋のすじぐわー

ツタやイタビの蔓に覆われた
古い石積みが続くすじぐわー
(路地)。



東(アガリ)ヌカー

崇敬を集めている井戸で、今
でもこんこんと水が湧き出で
います。



北ヌ宮(ニシヌメー)

土地の神様・土帝君(トーティークン)を祀っていますが、現在ではやきものの神、壺屋の守り神としても崇められています。



ビンジュルグワ

壺屋の土地や集落を守るタチクチ(村建て)の神様を祀っているところ。すべての行事がここに始まりここに終わるといわれます。

四、壺屋は樹や花も見どころ

四

やちむん通りやすじぐわーを歩くときは、目線を上に、下に動かすことも忘れずに。古い町並みに溶けこむようにして、さまざまな植物が季節ごとに美しい姿を見せてくれます。



